

令和7年度 面的支援によるモデル施設の育成・モデル地域づくり事業

## **介護テクノロジーを活用した介護生産性向上の取り組み**

令和8年2月19日

社会福祉法人いつつ星会 特別養護老人ホームわくわく荘

施設長 森 洋輔

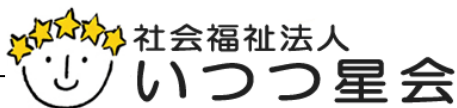
# 目次

1. 法人・施設概要
2. 取組概要・流れ
3. 取組結果・成果
4. 取組のまとめ

# 1

## 法人・施設概要

# 法人概要



- ・法人設立：平成15年6月
- ・運営事業：老人福祉施設、デイサービスセンター、認知症対応型共同生活介護施設、訪問介護事業所、居宅介護支援事業所
- ・所在地：二戸市
- ・経営理念：地域に根差した最善の福祉サービスを目指す
- ・特色：昨今の介護人材不足に対し健康経営優良法人の認定取得  
二戸圏域の介護事業者等との連携を促進  
介護の魅力発信として県内福祉科高校との交流を推進

## ■経営理念・経営方針

### いつつ星会は、最善の福祉サービスを目指します

私たちは、ともに歌い、ともに踊り、ともに泣き、ともに笑い、ともに愛し、ともに生きることを最高の喜びとします

#### 1.お年寄りを敬う心からの介護の実践

敬う心からの態度と言葉遣いを介護サービスで最も大事なことから実践します。

#### 2.職員の人間力の育成

五つ星のケアの実現のため職員の質の向上を図り、愛ある専門職の集団を目指します。

#### 3.介護を通じて人生・生活の質を高める(QOLケア)

介護を通じて高齢者と職員のQOLを高めていきます。

#### 4.自立支援介護の推進(ADLケア)

QOLを高めることを目標にまずADLの改善に取り組みます。

#### 5.地域社会の介護資源としての役割を果たす

私たちの仕事は、地域資源と自覚し、その役割をしっかりと果たします。

## ■いつつ星会の由来

二戸地方は、広域の市町村を線で結ぶと冬の星座であるカシオペア座のWの形になることからカシオペア連邦と呼ばれます。いつつ星会はこのカシオペアの五つの地域と、サービス評価の最高評価であるファイブスターをさしており、地域に密着し、最善の福祉サービスの実現を目標にしております。



# 施設概要

## 本事業の実施事業所

事業は、社会福祉法人いつつ星会の3事業所にて実施  
同一棟内に3事業所が存在し、かつ全事業所がユニット型  
各ユニットへの人員配置が必要となり、人材確保や定着が不可欠となっている。

### 1) 養護老人ホーム 紅梅荘



定員50名  
平均介護度3.0  
平均年齢 83歳

### 2) 特別養護老人ホーム わくわく荘



定員20名  
平均介護度4.3  
平均年齢 88歳

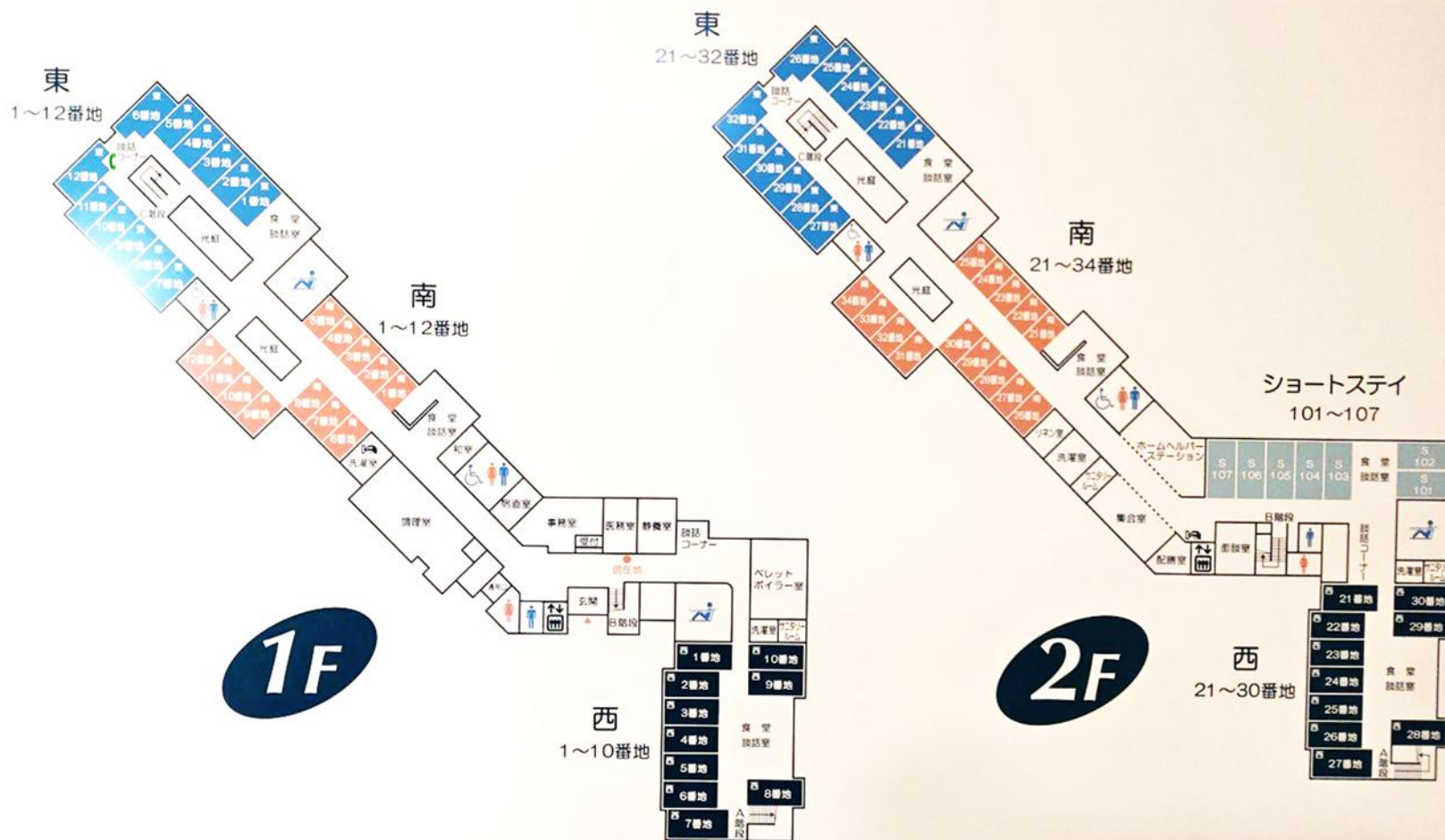
### 3) わくわく荘 ショートステイサービス



定員7名  
平均介護度2.2  
平均年齢 89歳

# 施設概要

## フロアレイアウト ～紅梅荘・わくわく荘・わくわく荘ショート～



# 2

## 取組概要・流れ

# 当法人が取組を始めたきっかけ

## 1. 介護人材不足の深刻化

昨今、人材確保と定着が経営課題に大きく響く  
認定制度の取得や地域の福祉科高校と連携するも  
**若年層は圏外へ転出。圏域の高齢化率は益々高まる**

## 2. 介護テクノロジーの導入

過去、移乗支援機器、インカム、介護記録ソフトを導入  
**“導入するだけ”では、現場の負担軽減や安全性向上は図られず**

## 3. 状況打開の方策を模索

業務改善に伴う介護テクノロジーの活用を知る（介護生産性向上）  
**“改善意識”×“テクノロジー活用”＝“状況打開”と考えた**  
「面的支援によるモデル施設の育成・モデル地域づくり事業」に挑戦

# 取組概要・流れ

厚労省“介護生産性向上ガイドラインの6つの手順”に取り組みました。



3

## 取組結果・成果

# 手順1 改善活動の準備をしよう

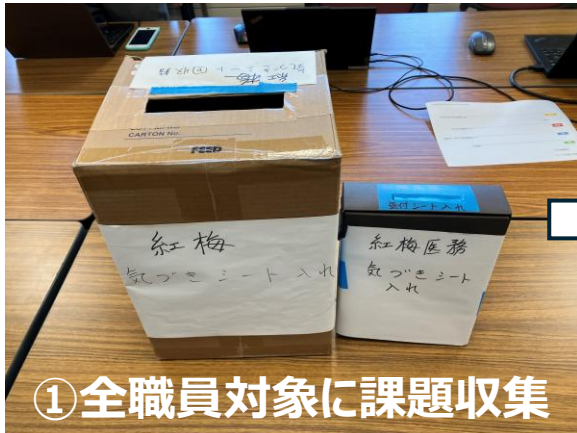
## ～生産性向上委員会の発足～

**多角的な視点**を考慮し、年齢・職種・役職等、偏らない構成と**役割**を担当

	実施メンバー名	役職	所属	事業上の役割
1	森 洋輔	施設長	わくわく荘・わくわく荘SS・紅梅荘	統括責任者
2	小笠原 亜矢子	相談員	わくわく荘	プロジェクトリーダー
3	田口 理沙	ケアマネ	わくわく荘ショートステイサービス	プロジェクトリーダー
4	東山 直子	相談員	紅梅荘	プロジェクトリーダー
5	泉山 美由紀	主任	わくわく荘	調査担当・事務担当
6	村里 コミ子	主任	わくわく荘ショートステイサービス	調査担当・事務担当
7	大黒 達也	主任	紅梅荘	調査担当・事務担当
8	山口 義孝	ユニットリーダー	わくわく荘	研修担当・マニュアル担当・運用ルール担当
9	佐藤 祐介	ユニットリーダー	わくわく荘ショートステイサービス	研修担当・マニュアル担当・運用ルール担当
10	塚根 均	介護職員	紅梅荘	研修担当・マニュアル担当・運用ルール担当
11	南館 桜花	介護職員	わくわく荘	技術担当
12	谷田 ひとみ	介護職員	わくわく荘ショートステイサービス	技術担当
13	上村 真理子	介護職員	紅梅荘	技術担当
14	夏堀 剛輝	看護師	わくわく荘	リスク検討担当
15	嶋野 麻由美	機能訓練指導員	わくわく荘ショートステイサービス	リスク検討担当
16	栗谷川 南	看護師	紅梅荘	リスク検討担当

# 手順2 現場の課題を見える化しよう

～「課題を抽出」→「因果関係図の作成」→「課題解決の道筋を整理」～



課題解決の道筋を文書化する  
わくわく荘様 優先順位 第1位

深層原因: 職員の事故を起こしたくないプレッシャー (=あせりやゆりの無さ) に対し

介護テクノロジーの種類: HitomeQケアサポート を導入することにより

好転換された深層原因: 業務に時間的余裕が生じること となり

原因: センサーマット使用者が多いことで生じていた 対応しきれない事例や休憩が取れない という問題が解消・軽減され

結果: 事故発生やリスクへのプレッシャー がなくなり

悪影響: 転倒や転落、またそのリスク の改善が期待できる。

アンケート (2023年7月) - 改善回数/室数 70回 → 50回/日  
- 事故件数 - セカリ 11件 → 30件/日

⑤ 課題解決の道筋

# 手順3 実行計画を立てよう

～可視化された課題×介護テクノロジー活用＝目標・効果を設計～

目標達成や効果を得るために、ご利用者の行動把握に優れる見守り支援機器を探索しました。コニカミノルタ株式会社製のHitomeQケアサポートを介護テクノロジーに選定しました。

	養護老人ホーム 紅梅荘	特別養護老人ホーム わくわく荘	わくわく荘 ショートステイサービス
現場課題	職員不足による職員一人あたりの業務量の増加	業務上のあせりやゆとりの無さからくるご利用者の事故発生や事故リスクへのプレッシャー	短期ご利用者の行動特性が理解できずに都度職員は過度な対応をとっている
解決の道筋	見守り支援機器を導入し業務の明確化と役割分担を図ることにより、ご利用者の状況把握が可能になり、業務量増加による問題を軽減する。	見守り支援機器を導入することによりご利用者の状況把握が可能になり、業務に時間的余裕が生まれ、対応しきれない事例や休憩時間が取れない問題を軽減する。	見守り支援機器の導入や情報共有の工夫によりご利用者の行動が理解でき、職員間での情報共有が円滑化され、ムダな訪室や、ご利用者を理解できない問題が解消する。
評価指標	<ul style="list-style-type: none"><li>・休憩時間の確保 (0.5h/回→1.0h/回)</li><li>・残業時間の削減 (10h/月→5h/月)</li><li>・業務負担のバラつき解消 (所感聴取/月)</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>・訪室回数の変化 (70回/日→50回/月)</li><li>・ヒヤリハット報告件数の増加 (15件/月→30件/月)</li><li>・職員へのアンケート実施 (ストレスチェック/月)</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>・訪室回数の変化 (〇〇回/日→〇〇回/日)</li><li>・職員へのアンケート実施 (所感聴取/月)</li><li>・レクリエーションの開催 (0件/月→2回/月)</li></ul>
期待効果	<ul style="list-style-type: none"><li>・業務の統一化</li><li>・ご利用者との催事開催数の増加</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>・ご利用者の転倒・転落の発生頻度、またリスク回避</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>・職員の心理的負担の軽減</li><li>・ご利用者へのサービス提供の充実</li></ul>

# 手順4 改善活動に取り組もう ～簡単にできることから始める～

利用者さんの動きに応じた**映像通知**と**訪室判断**から**業務改善**を始めてみました。



## 映像の“ミカタ”で変わる、日々のケア

？ スマホで通知を受ける

！ 映像で状況を把握する

💡 ケアに活かす！

### 直上の行動分析センサーが 行動を認識し、映像通知

居室天井に取り付けた行動分析センサーが利用者様の行動を認識し、スタッフの手元のスマートフォンに通知。ケアコール押下時もお知らせします。

### 💡 変化を捉え、ケアを最適化

雑末時に自ら歩行器へ移乗が来ていることが分かり、日ごろのケアやリハビリの効果を実感。データを基に、通知設定やケアの見直しを多職種会議で提案した。

日々のケアやリハビリ効果の実感  
日常動作(ADL)の維持・改善

### 🛡️ 利用者様のプライバシーを配慮した設計



居室内の状況が見えるのは、利用者様の行動があった時のみ。必要な時のみ映像が見えることで、利用者様のプライバシーを最大限配慮しながら生活を見守れます。また、映像をぼかす処理ができます。※オプションメニューで通知により、24時間常時録画を行うことが可能です。

映像のミカタは 無料トライアルで実体験可能！

詳しくは販売資料へ



### 💡 安全と判断し、訪室せず見守り

食事介助中に、別な利用者様の離床通知を受けた。映像で利用者様と居室の状況を確認し、危険がないと判断。そのまま離床動作を見守り、食事介助を継続した。

訪室最適化による負担軽減と自立支援

### 💡 ヒヤリハットとして、転倒対策

起床通知を受け映像確認したところ、車椅子を手すりに立ち上がろうとしていた。危険があると判断し、お声がけて訪室。その後、スタッフ間で情報共有し、転倒対策を実施。

転倒予防意識向上と安全確保

### 🎬 エビデンス動画

転倒・転落を認識すると前後1分間を自動録画します。転倒原因の分析やご家族・医師への説明に活用できます。

### ？ 利用者様の行動起点の通知



タイムラインで通知の一覧を確認できます。各利用者様の状態にあわせた行動通知設定が可能です。

# 手順4 改善活動に取り組もう ～簡単にできることから始める～

## ・介護テクノロジー導入前後で訪室回数に変化が見られた

	導入前 12/26～1/3		導入後 1/15～1/23	
	日中	夜間	日中	夜間
通知起点訪室数	1,507	542	516	333
様子見訪室数	1,935	1,115	2,066	1,102
介助訪室数	1,934	699	2,103	681
合計	5,376	2,356	4,685	2,116
	7,732		6,801	

訪室回数が、  
日中65%減、夜間39%減  
理由は、映像通知後の訪室要否判断が  
できているため

従来通りの業務フローより訪室回数に差異が見られていない  
訪室ルール改善により更なる効果が期待できる

テクノロジー導入1～2週間で訪室回数12%減  
運用（活用）ルールを上乗せすることにより  
更なる負担軽減が見込める

## ・成功体験が“好循環な改善サイクル”を醸成した

訪室回数が減った！



業務負担が  
軽減  
(成功体験)

更なる  
回数削減に着手  
(定期巡視の見直し)

更に  
業務負担が  
軽減

# 手順5 改善活動を振り返ろう

## ～上手かった点・いかなかった点の整理～

### ・職員ストレスはポジティブに変化（SRS-18）

導入前  
12月

導入前	(減少した) -3	-2	-1	(変わらない) 0	1	2	(増加した) 3
最近の仕事の やりがいの変化	9%	11%	11%	48%	14%	5%	2%
最近の職場の 活気の変化	9%	7%	20%	41%	16%	7%	0%

導入後  
2月

導入後	(減少した) -3	-2	-1	(変わらない) 0	1	2	(増加した) 3
最近の仕事の やりがいの変化	0%	7%	11%	47%	24%	7%	4%
最近の職場の 活気の変化	0%	7%	13%	47%	20%	4%	9%

介護テクノロジー活用が  
職員のモチベーション・  
職場の活気向上に作用  
している

### ・休憩時間の確保や残業時間の削減が次の課題

	養護老人ホーム 紅梅荘	特別養護老人ホーム わくわく荘	わくわく荘 ショートステイサービス
評価 指標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・休憩時間の確保 (0.5h/回→1.0h/回)</li> <li>・残業時間の削減 (10h/月→5h/月)</li> <li>・業務負担のバラつき解消 (所感聴取/月)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・訪室回数の変化 (70回/日→50回/日)</li> <li>・ヒヤリハット報告件数の増加 (15件/月→30件/月)</li> <li>・職員へのアンケート実施 (ストレスチェック/月)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・訪室回数の変化 (30回/日→15回/日)</li> <li>・職員へのアンケート実施 (所感聴取/月)</li> <li>・レクリエーションの開催 (1件/月→3回/月)</li> </ul>

4

## 取組のまとめ

# 職員からのコメント

## ■ 映像確認

- ・訪室要否の判断につながり、肉体的・精神的な低減効果が大きい
- ・他業務をしつつ、状況を視認できるため、効率的に仕事ができる
- ・慣れると便利さを実感する
- ・通知の多さ、適所への通知に改善していきたい

## ■ 情報共有

- ・複数の共有方法が用意されているため、TPOに応じた使い分けが便利である

## ■ 記録業務

- ・タブレットからスマホ入りに改善できれば、残業が減らせる

## 事業活動を通じて得た学び・感想・今後の方針

今回の見守りセンサー導入により、事故件数の減少や訪室回数・歩数の削減など、一定の効果が見られました。また、SRS-18によるアンケート結果からも、心理的ストレスの軽減や職場の活性化といったポジティブな変化が確認できました。

一方で、十分な成果が得られていない取り組みや、新たに見えてきた課題もあり、挑戦はまだ道半ばです。地域が抱える課題は、一事業所だけで解決できるものではありません。地域の介護事業者が連携し、ムリ・ムダ・ムラを省きながら生産性を高めていくことこそが、限られた人材で持続可能な介護を実現する鍵になると考えています。

今回わくわく荘に導入したHitomeQは、ぜひ実際に触れて体験しに来てください。介護テクノロジーに不安や疑問をお持ちの方、これまで消極的だった方、ベテランの皆さん、みんな大歓迎です。どうぞ、わくわく荘を“使い倒す”つもりでお越しく下さい。

私たちの取り組みが、皆さまの一助となれば幸いです。

共に明るい未来に向けて、一步ずつ前進してまいりましょう。

これからもよろしく願いいたします。

ご清聴ありがとうございました

